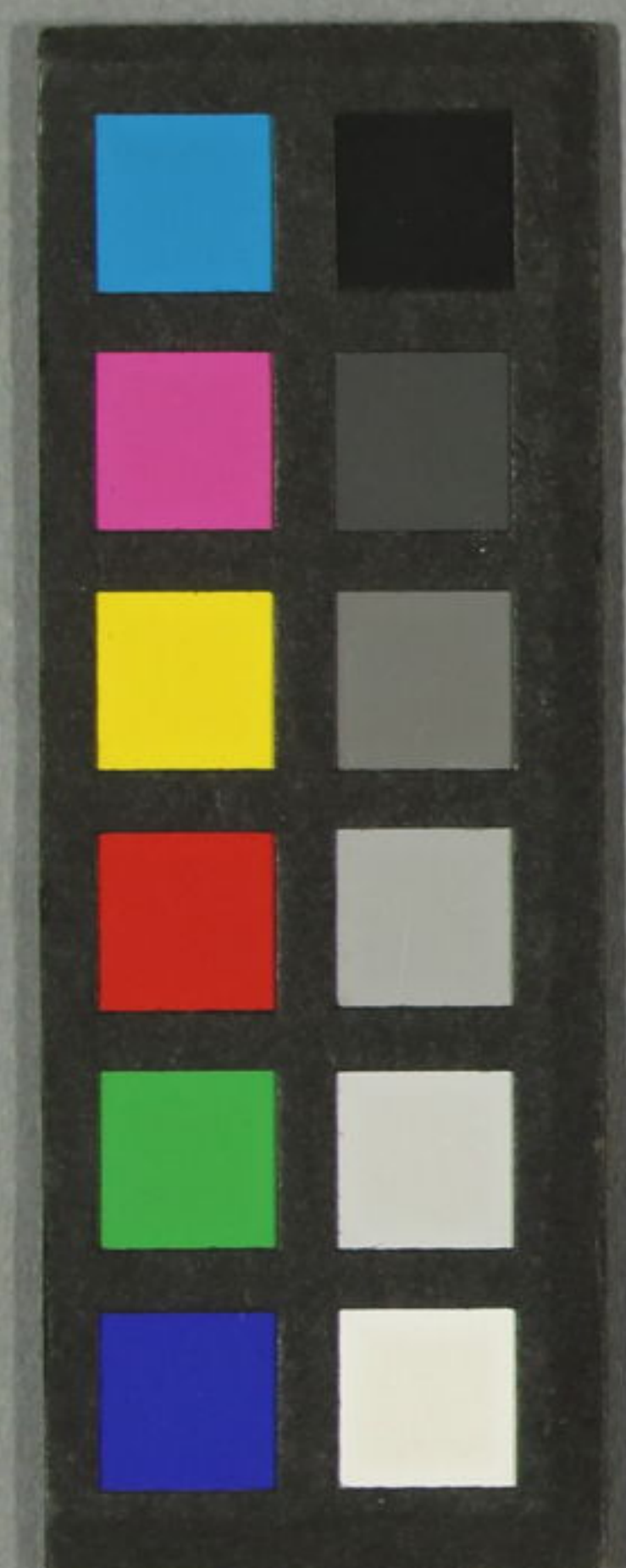




新花摘

上局

從四月八日



5

1875

1



其角堂永機編
小野桃齊校

新花摘

乾坤

癸未晚秋

白雨社藏版

新花摘

天保五年六月九三日の於る處
おとこ悲しき多き歳いやはや
はるのうゝ河もよ晋子も春も
るもよ花摘の故に形とゆも
起しぬもよむ秋の羈旅のうゝ
夏おの仙境の遊に花を排し雪を徊り
叶るわづの草葉の紫の梅の成りて

終く五十年の星霜の如く
こゝに年十回光の忘のやう
その日そのお見ゆ文音の句
一夏百句の終り終り隨時
海内の道行は終る終る
おふら彼日記なるを

一燈礼 永機述

五月十日

陰曆四月八日

長建寺

灌佛や十二の時

授

十五日

深川浄心寺を過りては、新比翼塚と
いふ所ありて、その情死にけしきなる
以て、あやむきなるを、

懸懸のこゝこそは、

西京

そのおぼろけたるは、

芥舎

神のまゝ、それおぼろけたるは、

御定書

活のふもて来うこそなれ

津一
松翠

声なきもあはれ

トチキ
石花

西の法編よ

掃部もあはれ

西京
百可

十六日

お舟へお乗る北画讀の一軸を
ついでうきものりふ又この櫓の
あはれお舟のりふのりふのりふ

四時一この櫓のりふ

松

あふ年ふもあはれ

静和

紫のりふのりふのりふ
夕暮のりふのりふ
何のりふのりふ

お裁
松
直

十七日

お舟のりふのりふ
居職して

切のりふのりふ

松

まのりふのりふ

尾
あ

お舟のりふのりふ

お舟のりふのりふ

西京
松春

九月 善哉庵中

夜ハ寝るやあけの月	於月
東ノ風ハ吹く	常盤
法テ何處をゆく	無一
もの思ふ川	市川
おの果るを待つ	魚心

正千二

模スカ

雪蕉

於

九月 吾能哉とて思ふ

結るの針	於
羽子	菟子

と合ふ

菟子

九月

親の子

所を	於
----	---

小金井

を	於
---	---

ひらりと移舟のりるあはれ イッ 連水

宿著てりやきものちひと ありけ

九三日 亡師宗蓮居士の御

一と葉をよみて十七蓮 （まを） 於

九四日 翁百九十回忌 仙台南山より句をよみ

松島内膳 （まを） のま

郭云 鱧を陸す。あしひ 素石

ちと寒き日何う牡丹の咲け 然字

浅きりや 旅のまを神の九十九 （まを） 金羅

九五日 遊紅葉館 （まを） 一室より利休の像を

あまきりや （まを） 大徳さまのありけ 前の川上と白河本とをいし 鳴子

け一峠と生涯を破りし （まを） 夢のうて

和らふ住よ （まを） 魚のありけ 於

一と又我住 （まを） 山集

本望お伯

ゆきより 松屋をいひあふ （まを） 夜 成一 （まを） 柳

多中多しるるるるるるる
待て候なりけり何なり

極高
梅有

九六日 田家

みーるをまはるるるる
龍をいりりりりりりりり

極
酒意

策のきりりりりりりりり
草庵

園策

あつた日ふりりりりりりり

兼高

草庵

りりりりりりりりりりり

秋

蓮阿

九七日 郊外

桑つりりりりりりりりり

於

九八日 如來肩問るるるるるる

夏の留士佛りりりりりりり

五子

露の葉りりりりりりりりり

右儀

おるるるる

煎ハシ

此すみりりりりりりりりり

正義

雲の松のやうな風

東京

黄公

吹く風の初めの風

稲雄

遠くへ行く旅の

遠方

仙草

残りの旅の

十湖

ふと思

江の舟のゆき

三向

霜村

三つふの果の旅の

五千

安原

六月一日 八百善 茶より 正午

席上客

客

床

袖の

遠く

旅の

義政

土

左

釜

切子

炭

旅の

石

古

土

旅の

羽

山

後入

麻花入經筒

は雷高第

花 左山蓮

茶入

仁清

第一尾伊織

茶碗

後所中 研庄
後所系 不味書

茶入

東山の秋ととも筒

徳宗も心ある茶碗

茶 初昔

上本後

一節 ころん 茶碗

茶碗

同の茶碗をうーしはねあてて

郭云義政とのききまつき

控

二日

巫山の茶碗をうーしはねあてて

夕風 松葉吹雪のうーしはねあてて

控

入梅の茶碗をうーしはねあてて

竜吟

竹の茶碗をうーしはねあてて

正々

護水

三日 於亀戸社頭千白投口

守武の負徳をきけりふ

控

通すす川の水をうーしはねあてて

静五

毫の茶碗をうーしはねあてて

太筆

一花うゑの枝のさゆへ
帯のうゑのゆふき原
梅年

卯日

皆のあつたては
ひつさやひつさなる
ささ舟のき水戸沖鶴
あつたのあき色るて月
訓と一内町を人出の文藝
二葉

五日 東叡山院

釣旗のうゑの
もあきなるものし春の昔
鮭の子乃そり川出のき
旭扇

六日 雨 江の島松林

あき成やあき荷のき
竹葉の浦
ほふに九輪のあき

七日

浜のやうな草の上から浦沿

於

夏の草の四角のうへに湛る

梅年

杜戸奉樂

田子の所足りけ也すゝ石

於

十八の町ありあすすゝ石と云ふ

八月雨 榎嶋

琵琶の撥く浪雷接せんも

、

穴寂寄石

形のうへに草の如くしや五葉

年

児の割

龍蛇の松のうへに草の如く

生仙

あまきくをうけり
あまきくをうけり
あまきくをうけり
あまきくをうけり
あまきくをうけり
あまきくをうけり
あまきくをうけり
あまきくをうけり
あまきくをうけり
あまきくをうけり

夏子くや昔一のうへに割の色

色

はゆをものゝうへに扇に

於

九日 晴

天の原より忽ち大逆浪天地をくぐりて雷電
驟しく震動家原をくぐり満々周々
のまをくぐり四方をくぐり出るる方青嶺
とて一丈余の嶺さ出るもの頭尾は浪の
くぐり有るなりとて又たり海上は
嶺さくぐり上ぐるその様は蛇の如く
首尾現るなり是れ龍神海上に出現の
心地はくぐりておなりぬなりとて又
くぐり

全の背中より腹を三重四重とて阿がく
右の肩より頭をくぐり左の肩より
玉腫の光古殿をくぐりて右の肩より
くぐりて人音う出して汝神佛儒の
三を重んず神ハおのの祓祓とて心その
理の如く擁護とて垂れん心祈ん又
口はくぐりて佛ハ三世不可思議の
何神なるか十二の佛智をくぐりて

かすい襟を心通る眼よりその平粋の
美麗をあらわす——おもしろきものとして
ん中、儒を以てしるすもの、まをけりし
まじしと告げしもの、そそまけりし松上
甫の意、むろく、にきふの心をね、なり
すく、又松を起して回す——東嶽山を酒、
志し——糸才天へ糸指——多しおつて
心転を吐てしもの、えきふ師のつて

執事 佐 糸指——何れもその心をわき
まけりし、鐵壁をくく、いけり——久
弟おし左

異夢は英傑 前來事可絶
芳菲春日暖 依舊及殘枝

入松早まらして、木、園を執し、是を、まき、
き、め、何れ、さぬ、雲、さぬ、か、こ、ろ、ま、
り、ま、は、は、り、し、神、園、の、向、く、靈、奇、の、に

さぬき御言り月満ちるを御詠
まのちり

云の基屋り歌れを蓮の 音子

蓮のちりよりきれい草を御

入柙々糸天の雲前よりぬめいけをしらふ

天を川水のよりし蓮の葉を入松

五元集二蓮の二句有て只雲をみちを感
糸天の糸すそに海よりみ草なるを知ら
けは美草はのちすけ記をみるをみして
はさりの法縁と云

けけの藤よりさく 表の歌 春の歌

十日 雲を歌 雲相手をゆりしある

けけの藤よりさく 表の歌
けけの藤よりさく 表の歌
けけの藤よりさく 表の歌
けけの藤よりさく 表の歌

けけの藤よりさく 表の歌 於

外史をみむ 十句二

新古今よりさく 表の歌 けけ

十日 散歩

苗のまゝ上野をぬぐの時分
東京 晩色 抄

十二日 雨

はるかにさるものゝ波山
カ、 翠霞 抄

雨戸あり

祖母懐の抱ふ魚より
尾が 杜若
けぬはく日和田の鯉
非戸 卓志

十三日 於て早床の扇く ミテウヤの病

初め鳴り鯉は破も 年にな
於

破れよて

存遠き日和田毎の蛙うな
かつ八樓 如竹

其角堂定日

薄のちよもく 風の筋
梅年
おる道ハ成るお所より串ハ
於一
くさくさのよう かな 暮るお
る雲

角くも中ノ乳のちきり

板屋

岸内並へしちきり松の乳

其冠

山隈の中影みゆる火串の

松垣

けぬ酒肴高志公の序に陪て

狂言 寝音曲

店一

鐘の声

東言

いもむし 控よ ちりちり冠者

控

花貞尼也福

静かな書し

あまてれふあふし ちきり栗

瑞唐よりけしききい花のさく

トヨシ

蓮宇

くくくく遠き生西の柳うな

平仙

あふし 以起さふいふあふ

汲古

十五日 一息を絶えしつゝのとき

大和路中けしききいなる麻

控

くくくくなる旅人そ吉野山

尋香

口けしききいなるあふ

ちきり

十六日 好きもの——うたはれは接ぎ

酒の心乃 膚を洗ひぬる月面

涼しき風をうらみき波の死

十七日 閑坐

客あふくそきこふ也若柳

あふく声を磔りし時

十七日

十牛解

酒肆魚り化令成佛と云

細川——す。心はあつたふん

於

江波

子住

素朴

保多

於

くまの日和を色すまき芭

ナユヤ

但康

酔ふを能く淡のり

ものいそと顔を見すあはれおに、

禪

十八日

夏は菖の葉とさういふ啼鳥

涼れり新米のあはれす

碓氷のあはれす里の月

静かなるあはれす河の海

ウユ

五子コ

於

笑山

晴

中壽

十九日

朝の心の他をい

控

十九日

竹のゆみの九日

冬やま

会する通す田の暑所

一軒

行るやまをい

相里

米の入りや

乙雄

十九日

花よりさるはなをい

撫子や書なき宿のかかり

控

十九日

雨夜獨坐

足深ふ拍子

十九日

慈母五十年に當

る

あ

お

梅子

法の声めりてきくもの園あり

松塙

けりて涼きゆをま向ふ

永賢

虎のなる佛をすむ

永國

九卯日 山越ぬ杖の菟好と三葉をうくる

一夜酒雪なつてき日しる

於

破るいふとせめてうへに

みうのなるをうす子松山

菟好

玉塚のなるをうす鬼薊

、

南無うへのもて

初夏のころに松葉に實相を

尋色

影のなるをうす子松山

大夜

南無

棒に板敷きてうす子松山

五子

青曉

俗賣の大きき法にほる園

三子

希精

九五目

九六目

九七目 六祖ノ讀

夏籠の白き朝もか
 糸端も雨もあふるの
 九日 都外道土六路す
 起くは事な麻刈す
 水戸し月の光をたか
 遠お離

山を逢ふとぬきし船の
 草々雨も成るる麦の秋
 静土
 糸境

九日 遊市村を

散骨にうき着せる暑
 備わりの汗も初のも
 陽より舞臺の解を夕涼
 梅幸

三十日 止波浦にて

一畝の藤屋を登り坂を
 おもひありけり其の寂
 竹窓

新刊

七月一日

ふきりぐさめをすする夜の郷

持

夏の目々著るる箱根山

五河

蕙畝

二日 河東草人の江戸ちやうを題ス

音信の闇のよめやうりてる賣

於

三日 西 元堅

くわいやはき定るるり所

くわいやはき定るるり所の
反極さるるり所

ひるりやうき涼のおんけ

大坂

流美

しるりやうき涼のおんけ

水鯉をくわいやはき定るるり所

晩草

京・津・越のしるりやうき涼のおんけ

佐保娘のくわいやはき定るるり所

高島

服はくさるるるの著るる箱根山

御水

日よるにやうき涼のおんけ

竹文

おんけのくわいやはき定るるり所

似水

新刊

拙き俳句を問ふ

葉形は咲くみゝし柿の葉、	青柿
枯影はくむ人門初 宿、	徐来
二の角を往く舟の影、	丑春
くまのくまのくまのくま、	文房
鶴を待つ外の鶴しれまた、	九華
初雁日くしてのののの、	不角
時のみゝみゝみゝの寶ふ、	枕子

慣として流るゝ菴の欠硯、 小窓

春松門以夢中 夢の虫 小叟

能く是ハ細くして 夢の中 八子乃 社中 翁松

山里の山くまのくまの 硯うな、 精光

秋風のけねるくまの 小笹原、 梅古

遠くくまのくまの 秋の、 園在

中ノ雨くまのくまの 入の 吟心、 其徳

俊室晋翁陽京

實を成さるるを

大坂

品居

を送るる所を扇の

花村

浦に所をともて入る

井資

い播戸政と遠く杖を曳きおれ

三のののののののののの

似蘭

湯のののののののののの

季鍬

をふくむる一をを

をふくむる一をを

雪子

ちまののののの

をふくむる一をを

巨鍬

をふくむる一をを

深鍬

をふくむる一をを

筆鍬

をふくむる一をを

字志

をふくむる一をを

古

竹苗

けのをふくむる一をを

山間のけののののの

藍庭

をふくむる一をを

藍皮

いづれに已むといふ人（菊はさきより）

あふむしるもふく（田植） 已百

いづれに已むといふ人（菊はさきより）

。

いづれに已むといふ人（菊はさきより）

菊はさきより十数仙を以て（音）

いづれに已むといふ人（菊はさきより）

け一袖を静所言（茶） 已百の菊はさきより（音）

いづれに已むといふ人（菊はさきより）

水号（小里） 已百

あふむしるもふく（田植） 已百

いづれに已むといふ人（菊はさきより）

いづれに已むといふ人（菊はさきより）

いづれに已むといふ人（菊はさきより）

拾穂軒夢吟思

いづれに已むといふ人（菊はさきより）

いづれに已むといふ人（菊はさきより）

久居 夕松
 三ツ家 青溪
 招らば手何〜何ふ草花、
 力尽す〜水路の走新りて、
 何〜何處に遊〜何處、
 乙亥

北山芭蕉菴の所より

西京 森成
 招ら〜を雛子と唱〜なふ五

卯日雨 蓮亭

曉の暁を照ふ音や周茂叔
 於

辞也

笠後けらもの何〜何〜
 古外

四ノ五を八日三の四〜何〜
 世中流〜何〜何〜何〜何〜

芥子園の太のち〜何〜
 立意

五日

住〜何〜何〜何〜
 土浦
 下毛 山
 艸のち〜何〜何〜何〜
 暑

桑子補上

六日 燕之序ありて

瓶底根在泥中
也其爲

七日

支那の管一頁切

學文臨行

歌の道六藝火の道一
咀のふ
活集

涼風の初すけ
田川 柅 高

八日雨

如て照る所の如く
言燈籠

水海ノ水増スルノ水ノ爲ニ成ル也
生所

野
 其
 一
 伏
 家
 ち
 一
 子
 枕
 尾
 羊
 山

九日雨

十日
了感

珠紋の緒と同、淋濁、

十一日

抱影や巫山のそり苔盆

おのゝのりゝとておののね トチキ 清玄

ゆゑのまゝに

とくゝとやんは水の寂梨 指並

十二日 梅影の一子あり ときり出羽のるを

早多なるり ぬのき各のふちる 於

病中のみよはるゝとてとくゝとやん入物の衣梅影
けのをひききとて八月十八日 寂梨子ハ馬ノハ
終り、地多水と成るゝとてとくゝ

十三日 りゝゝ

免はる揚屋のりゝの掃除

十四日 けゝゝと浦の金沢子

舟興

すゝはるゝと浦の水のり

涼ゝとやゝとゝゝの遠回り 崔志

金龍精舎

ゝゝとやゝとゝゝの世は清玄 物の家 黒玄

十五日 上行寺

ゆゑとやゝとゝゝの嘗ゝ墓乃あり 於

來

天台の序山ニ 心經午房といふ所より
その一卷より取る旨をさしとて
考へたるしよりその名のなり
かりとれハ也臨述情の類よりなり

一々さうつはるて 鮭の鱗

東海乃

白砂の坂の山

ア、
茂精

竹の子持あせしるゑん振

室井家二世晋阿久事の小祥忌つ
影々あるとして

一字一音の凡そ数句經

性

辭也

わけて待蓮を猿のちうへ

室井

女

也善

[illegible]

毋

此を以て六邊より作る

七方

古

耳に就て是やと云ふ所の處

卷之三

もろくろひき並舟の馬

根中交

新義稿上

三十一

何ふあくなきある夏の魂象 ニ世 晋路

この音き翁の末孫ゆが国を

十八日 市のはる居のしるをまへ

上はる赤い字のすく暑うあ

玉柳は新疎の居をと形(ま)を柱て

みとまきやあ百人の千柳の水 夢洲

十九日

あゝ蓮羅ゆす白くあ 於

十九日 兼蓮善女とも向りて 宝井あま子

夏硯のなりのよるなり女文字

夏の季に海まき中也のあ 三瀬

川先の一足あまの人の ス力川 仕山

百合赤し 柳道のまのあ 秋タ 陰山

柳まふみ降るしすく川 シテ 月静

さるし 八つるあまの柳 省我

雀のいともり 袴のなを電 其弥

九日 遊天現禪寺謁古道和尚

すゆや茶の泡のほへ刻

於

茶の湯の涼さひたり

素直

水おとる音とあし五の虫

弓雲

九日 去安、古來名利の地とて我翁も

何もの羽をきりてとて

於

梅津道遠

夕顔や桐と堤とすれり

和春

みづの娘のや〜我土用は

静和

口わりの竹のけりち〜あ

梅交

な〜る人甚だのあふ〜あ

巖心

六日 待乳山懐こく夕顔て

公家も中た賣のりあふ

於

何〜る水減さる〜涼心

袖丸

我〜るてり〜入〜る夏の月

其風

扇〜る〜る〜る〜る〜る

為派

七月廿五日 庚子 宿大跡 山

夜ふくむの我ふ一重かか油 正義

まぬくまぬく菴の吸き下 水

く国を家臣の杖きとめて

時りぬる二三月ふくみ角ふあ 丁峰

廿四日

存遠さかたかきる 柳

廿五日 酷暑

けりともむの秋の陽に 峯のま

夕立のくく限をき 存あけ 柳甫

廿六日

石山やよきもけちを割きたるの昇地より

権のふくみ権のふくみ代り 宿 於

石山のま 國よりくく正なる 大ツ 昇池

くあき 言く 涼を解き 祇年

一ふきの訓で 唱ふ 紀の味 ノミロ 長候

雲陽たつ 浅るの色に 杖也き 湯ノス 春夜

九七日 かつらつちをみちる声なり

眼みゆのこころなる情なり

於

六日 金地院内

生けかきし 蟬のさるる音なり

、

六九日 原

涼けしやまの山入のま

、

涼けしやまの山入のま

あはし

新原

秋の風を吹く上

あはし

晋水

原憲之徒蓋の如是

日はあてしやまの山入のま

於

三十日 病床の水はる蟬の付く音なり

我をさすやけえれ土の虫

た

雲山

けむをわさるの聲はるる音なり

三十日 智艶童子の茶田送り

縁のたのしみなる果

於

惜むるはわさるの音なり

こつ

八朔やとくしつゝの柳 イカホ 栗固
濱のなごころ涼 ウチ 吹
苗くさ人 ヒシ 一矢
竹 カマ 曉
茶 カマ 芦葉

新花摘上のり

